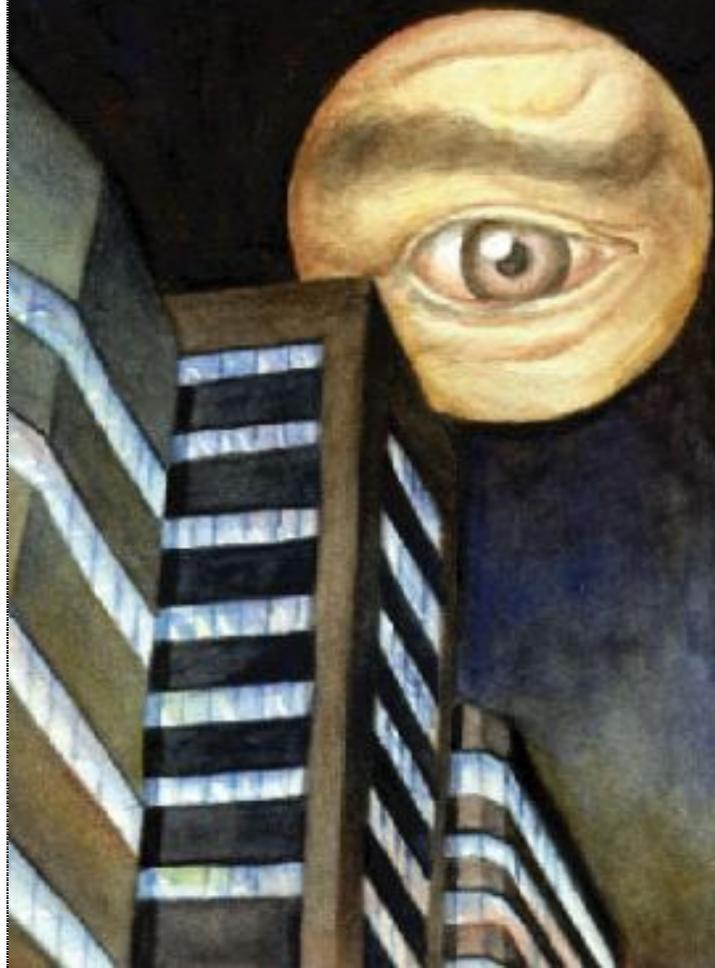


ザ・ゲートウェイ

水木 楊 You Mizuki

THE GATEWAY



第一章 美女とカラス

(一)

眠りの薄皮がだんだんとはがれ落ちていくうちに、耳のあたりでドンドンドントンと鳴るものがあった、はっと目を覚ました。ドンドンドンは、電車の音である。大地に密着した線路を走るときの硬い連続音ではない。高架線を行くときのように電車と線路とが響き合い、線路の継ぎ目の上を通り過ぎていくのが体にはつきり感じられる。

どんなに眠っていても清瀬の近くになれば、目を覚ます自信はあったのだが、思いのほか深く眠り込んでいたようだ。昨日からのゴルフ、宴会、そして朝のビールがたたったらしい。久しぶりの同窓会だった。

電車の音だけではなく、窓の外の光景がいつもと違う。西武池袋線は線路のそばにまで商店街や住宅の家並みが迫っていて、視界をさえぎっている。ときどき踏み切りがあつて視界が開けはするが、街が目の位置とほぼ同じ高さであり、ちまちまとした光景を繰り広げている。

ところが、いまは目の前が開け、空が妙にだだっ広いのだ。数百メートル離れたところに、白っぽい建物がいくつか規則正しく並んでいる。窓の多い建物で、ベランダに洗濯物を干している。マンション群である。その向こうにも、白っぽい建物がいくつか積み木のように点在しており、スーパー風や学校風の建物も入り混じつて灰色の遠景に溶けていく。

西武池袋線沿線はなだらかな起伏があり、それがだんだん大きくなりながら秩父山地に分け入っていくのだが、外の光景はのっぺりとしていて、あくまでも平たい。

慌てて首を回し後ろを見る。小さな沼の前を通り過ぎていく。水鳥が数羽浮かんで、羽根を休めている。その向こうがせいだか泡立ち草の枯草が茫々と広がる野原で、やがて背の低い松林になる。松林の前にコンクリートの地肌を露出した大きな建築物がある。湾曲した屋根のある醜悪な建物だ。建物を迂回するように自動車道がカーブしながら走り、松林の中に消えている。

一体ここはどこなのだろう。立ち上がるうとして、足元にあつたポストンバックを蹴飛ばしてしまう。立てかけてあつたゴルフバックが傾きかけ、慌てて直す。座席の一番端に座り、ゴルフバッグを電車の側窓に押しつけていたのである。

立ち上がり、背後の光景をしっかりと見る。

電車が一瞬轟と鳴る。運河を渡るところだ。運河は真っ直ぐに伸びており、その先の空間がぼっかり開けている。松林がそこだけ切り取られ、遠くの下に灰色がかつた青いものがのっぺりと横たわっている。

信じ難いことが起きていた。彼方の灰青色は、まぎれもない海なのだ。目をこすつて見直すが、海であることに変わりはない。水平線に貨物船のような船影ま

で浮かんでいるではないか。武蔵野を走る西武池袋線では海など見えるはずがない。

夢をまだ見ているのだろうか。最近は夢と現実の区別がつかなくなるほど、リアルな夢を見ることがある。これは夢だから、大丈夫だなどと自分に言い聞かせながら、嫌な夢を見ていたりする。

慌てて時計を見る。午後一時五十五分。池袋発小手指行き各駅停車に乗ったのは約三十分ほど前だから、そろそろ清瀬に着く頃だ。腕時計を外す。手首に輪の跡がついている。そこをつねってみると、痛い。これは夢ではない。

夢でないなら、何なのか。突然、恐ろしい想念がよぎり、鼓動がドキンと跳ね上がった。

まさか母のように、とんでもない場所をさまよい始めたわけではあるまい。母を特別養護施設に入れたのは三か月前のことだ。嫁の郁代が財布を盗んだと云い始め、変だなと思っていたら、外出してもどこに行くつもりだったのか、どこに

いるのかも分からなくなったらしく彷徨が始まった。「ポケって遺伝なんですって」と郁代は容赦のない口調で言う。たしかに、祖父もポケ老人になった。食事が終わると、「今日は大変御馳走になりました」と挨拶し家から出て行こうとして、母を困らせていた。四十五歳と言うと、少し早過ぎるが、自分にもあれがやってきたのだろうか。もう一度、自分の行動を振り返ってみる。東京駅でみなど別れたのが小一時間前。丸の内線で池袋に着いてから、携帯電話のモニターでメールのメッセージをチェックした。次長の麦田からのがひとつ入っていただけだ。

月曜の政策検討会議について連絡したいことがあるから、後で自宅に電話を入れると言っていた。確か電源は切らなかつたはずだ。

ポケットから携帯を出してチェックしてみる。モニターの液晶面が光っており、電源は切れてはいない。これだけ鮮明に記憶しているのだから、ポケが始まったわけがない。

しつかりしろと自分に言い聞かせて座り直し、車内を見回す。目の前に黒い皮のジャンパーを着た男がいる。丸い眼鏡をしており、髪が短く立っている。池袋を出るときからいたような記憶がある。いまはスポーツ新聞に目を落としている。その横に、短いブーツを履いた若い女がいる。この女は途中から乗ってきたのではないか。赤い水玉のスカートの下から太い腿が覗いている。

横には、小学校二年生くらいの女の子を連れた初老の女性がいる。孫とおばあちゃんの関係だろうか。この女も池袋ではいなかった。髪を茶に染めており、デイズニーのキャラクターをプリントした袋を膝の上に乗せている。さきほどからこちらをちらちらと見ているのは、落ち着かない羽生の様子に関心があるからだろう。

羽生はおずおずと尋ねた。

「ここは、どこでしょうか」

女は羽生が寝ぼけていると思っっているようだ。

「間もなく空瀬に着きますよ」と親切気に答えた。

「ソラセ？」

「豊津の次の空瀬です」

「空瀬……」

羽生は口の中で繰り返した。空瀬も豊津も聞いたことのない駅名である。

「これ、何線ですか」

女はどうしてそんなことを聞くのかという顔をした。

「内線Qですよ」

「内線Q、とおっしゃいましたか」

「ええ、内線Q」

「西武池袋線じゃないんですか」

「西武池袋線？」

女はふっと吹き出した。横の女の子が何か彼女に聞いている。女は何事か女の

子に囁いて、ふたりして声を殺し鳩のようにクツクと笑った。

窓の外には、つるつると光る超近代的な高層ビルが増えている。オフィスビルだろうか。

車内放送が何か一言だけ言った。あまりにも短くぶっきらぼうな放送だったから、何を言ったのかが、良くは聞き取れない。「次は空瀬」と言ったような気もする。

電車がワーツという音を出し、減速し始めた。電車全体がモーターや線路を滑る車輪の音などに楽器のように共鳴している。西武電車はこうはならない。モーターの回るウーンという音がだんだん低くなっていくだけだ。隣の女と女の子が立ち上がった。前の皮ジャンも立つ。空瀬はどうやら大きな駅らしい。

開いたドアのそばに行つて、外を見る。駅名を記したボードが天井から下がっている。「空瀬 (SORASE)」。前の駅が豊津 (TOYOTSU)、次の駅が汐田 (SHIOTA)。JRの駅の駅でも見られるような緑色の文字で記してある。

線路の向こうに塀があり、いろいろな看板が立っているのはどこの駅とも同じ光景だが、その塀の上から高いビルがいくつも見える。そのうちひとつのてっぺんに近くに、横文字で「Ocean View Hotel」という文字が並んでいる。

客は誰も乗ってこない。発車を知らせる音楽が鳴り、ドアが閉まった。電車は再びワーツという音を立てて走り始める。線路の向こうの塀が切れ、高層ビル群が現れる。カジュアルな服装をした男女や子供たちがビルの間にある広場を往来している。オフィスだけではなく、飲食店などもビルの中にあるのだろうか。日曜午後、クリスマススイブの平和な光景である。

高層ビルの次に綺麗に手入れされた緑地が出現した。広い公園のようだ。この街は埋め立て地の上に出現したようで、区画がきちんと碁盤目になっている。

席に戻るが、どうしたらいいか分からない。乗客は離れたところに、二人連れの中年夫婦がいるだけになった。たしか彼らも池袋から乗ったはずだ。小旅行から帰ってきたのだろうか。荷物を乗せたカートを足の前に立てている。話しかけ

て見ようかと思うが、二人ともものんびりと居眠りしている。

西武線には天井近い側面に「停車駅ごあんない」というのがあるのだが、この電車には何も無い。空瀬や豊津や汐田がどこの駅につながっているのか皆目見当がつかない。車内広告もなく、ただ「車内禁煙」という文字が側面に記してあるだけだ。

汐田にはなかなか着かない。駅と駅との間が長いようだ。電車が急に高度を下げ、窓の外の光景がどんどん目の上にせり上がって行って、ついに消え闇になった。耳に圧迫感がある。地下に入ったのだ。果てしない闇の底に引っ張っていかれるようだ。

電車はブレーキの音をききませながら、汐田に停まった。中年夫婦は二人揃ってきちんと目を覚まし、降りていく。羽生は意を決して二人の後に続く。重いゴルフバッグを抱え、ポストンバッグを下げながら、小走りに夫婦に近づいて声をかけた。

「アノウ、すいません」

二人は何事かといった風に振り向いた。

「確か池袋からお乗りになりましたね」

「池袋？」

夫の方が太い声を出し、首をかしげた。妻の方は薄気味悪そうに羽生を見つめる。

「西武池袋線にお乗りじゃありませんでしたか」

夫は少し不機嫌な顔になり、

「これ、内線Qですよ」

と言つて妻を促し、踵を返した。羽生は追いつがろうとするが、ゴルフバッグを抱えてでは速くは歩けない。相手はどんどん歩調を速め、途中一回振り向いただけで、改札口の向こうに消えてしまった。

羽生はひとりホームに取り残された。構内は蛍光灯の青い光に包まれ、その先

に線路の闇が黒い口を開けて待っている。駅の壁には、路線図らしきものはない。自分がどこを歩いているのか判らなくなった母は、こんな風に戸惑っていたのだろうか。

戻るしかないと思う。とことん乗ってみれば、どこかで池袋につながっているはずだ。少なくとも、何か手がかりは掴めるはずである。

反対側のホームで待っていると、やがて闇の向こうに光る物があり、大きな響きとともに電車が現れた。頭のが丸くなっていて、西武電車とは似ても似つかぬ恰好をしている。正面にも、側面にも、どこにも行き先を教える表示がない。とにかく乗ってみるしかない。

中には数人の乗客がいる。みなとつづきの悪い不機嫌な顔をしているように思える。その中で比較的機嫌の良さそうな若い女の二人連れをつかまえて、おずおずと尋ねた。

「すいませんが、この電車、どこ行きでしょうか」

背の高い方が怪訝そうな顔で問い返した。

「どこ行かって……どこにいかれるんですか」

「池袋なんですが」

「池袋？」

二人で顔を見合わせてから、声を合わせるようにして答えた。

「ありませんよ。そんな駅」

「おかしいな。あるはずなんだけど」

二人は何事か囁き合って、羽生から離れていった。

電車はしばらくして地下から抜け出す。さきほどの空瀬を通り過ぎ、豊津のマンション群が後方に消えると、工場の数が増えてきた。白と赤の縞模様の煙突が立ち並んでいる。運河がいくつか現れ、倉庫がたくさんある地帯をしばらく走る。再びマンション群が出現するが、前よりも数が多い。そのあたりから電車は右にカーブして、だんだん内陸に入っていった。巨大な観覧車のある遊園地がある。

スペースをたっぷりと取った遊園地で、子供たちが走り回っているのが見える。

行く先に小さな丘陵がある。丘陵の麓には、一戸建ての家が軒を連ね、丘に向かって這い上っていく。規格化された一戸建てのようで、みな同じように青い屋根をしている。短いトンネルがあつて、今度は丘陵一帯に団地風の建物が広がつた。空にひとときわ高くごみ処理場の四角い煙突が伸びており、その下に体育館のような建物があつて、自転車で往来する人の影がいくつかある。

いくつもの駅を通り過ぎる。北出、寺地、朝日ヶ丘、鹿野口、鶴草公園、野呂、申ノ橋、南出……。いずれもどこかで見たことのあるような街の風景だが、わずかに違和感がある。その違和感が何から生じるのかがいまひとつつかめない。いつまで経つても、池袋は現れないし、その手がかりもない。さらに何人かの乗客に「池袋に行きたいのですが」と尋ねるが、反応はみな同じで、首をかしげるだけである。執拗に尋ねると、気味悪がつて逃げていく。

一時間半ほどが経過して、電車は地下に入った。最早なすすべもなく、羽生はただ座つたままになつた。

ところが、電車が何番目かの地下駅に滑り込んだとき、
「えっ？ まさか」

羽生は大きな声を出して、座席の上で跳ね上がった。恐ろしいことに気付いたのである。

停まった駅名が「川辺」。見覚えのある駅名だった。汐田のホームで見た、次の駅名ではないか。そうすると、この電車は山手線のように循環しているのだ。次の駅が汐田なら、その次は空瀬になる。いくら乗つていても意味はない。池袋への出口はないということだ。どこかで降りるしかない。

川辺の次の駅は、やはり汐田だった。

羽生は空瀬で降りることにした。いちばん近代的な街のようだし、清瀬の瀬の字で共通している。いまはどんなことでもいいから、すがりつきたい思ひだった。

空瀬に着くと、夕闇が迫っていた。時計は四時四十分を指している。「Ocean

View Hotel」のイルミネーションが青白く光り始めた。同じようなホテルのイルミネーションが海の方に二、三ある。暗いままのビルもあるが、明かりの灯り始めたところもある。小売りや飲食店のあるビルだろうか。

二時頃には帰ると郁代には言っていたので、携帯で電話する。聞き慣れた呼び出し音がして、ほっと安心する。いきなり、つっけんどんな声が返ってきた。

「どうしたの。遅いじゃない」

「それが困ったことになってね」

「どうしたの」

「妙なところに迷い込んでしまった」

池袋からの経過を丁寧に説明する。

「変ねえ。あなた、酔ってるんじゃない？」

「酔ってはいない。酒は朝、ビールを一本飲んだだけだ」

「そんなこと言って、どこかに寄り道してるんでしょ？ 今夜は守夫さんが

来るのよ。覚えてるわね」

守夫というのは一人娘の祥子のフィアンセで、彼らは来週の土曜に結婚する予定である。こまごまとした打ち合わせが残っているのだ。守夫には両親はなく、羽生夫婦が親代わりようになって相談に乗っている。

「覚えてるよ。だから、焦っているんだ。でも、これはどうにもならないなあ」

「あなた」

と言いかけて、郁代は言葉を呑んだ。羽生がさきほど考えたのと同じ恐ろしい想念がよぎったようだ。羽生は慌てて叫ぶ。

「おれはボケてないぞ。正気だからな」

郁代は笑いにまぎらわした。

「当たり前よ。まだ若いんだから。いま携帯で掛けているの？」

「そうだよ」

「ちよっと待ってね。こっちから掛けてみるから」

万一、夫が彷徨を始めた場合のことを考え始めているのかもしれない。携帯でリモコンをして、つかまえるつもりだろう。

妻の言う通り電話を切ったが、液晶のモニターは通話可能な表示になっているにもかかわらず、いつまで経ってもかかって来なかった。電車が一本通り過ぎるのを待つて、こちらから再びかける。郁代は怪訝そうな声を出した。

「おかしいわね。何度掛けても、『電波の届かないところにいる』って言うのよ。あなた、本当に携帯で掛けている？ 公衆電話じゃないの」

「こんなことで嘘を言ったってしょうがないだろう。本当に携帯だよ」

「おかしなことがあるものね」

羽生は情けない声になった。

「なんだか訳が分からなくなってしまった。とにかく、何とかここから出るよう努力をしてみるしかない」

「夕食だけど、鳥の方はどうするの」

クリスマスイブには鳥を焼くことになっており、その準備は羽生の役目なのだ。鳥の詰め物を整えるかたわらでスープストックを作る。電子レンジで焼く間、このスープストックを数回かけてやると、ジューシーに焼き上がる。準備に取りかからなければならぬ時間が近づいてきている。

「鳥はそっちでやってくれ。最悪の場合、飯には間に合わないかもしれない」

「仕方がないわね。また連絡してちょうだい」

こうして電話は切れた。こっちから掛かって、あっちから掛からないというのは確におかしなことだった。電波が届かない場合は、どっちからでも同じであるはずだ。

羽生はNTTのサービス係に電話を入れ事情を話して、ただちに原因を突き止めるよう要求した。サービス係は郁代と同じようなことをしてみた末、

「お客さん、こちらから掛けている間、本当に電源を付けたままにしていただけですか」

と失礼なことを言った。羽生がいたずらをしていると思っっているようだ。

「何てことを言うんだ。こんなことで誰がふざけるものか」

羽生の見幕にびつくりした係は、すぐに原因を突き止めるからと謝って名前を残し、電話を切った。

ジャケットを着てはいるが、日が落ちると急に寒くなった。嫌な予想が頭をもたげる。このまま今夜家に帰れなかったらどうするか。

馬鹿な、と打ち消す。そんなことはあり得ない。何が何でも今夜中に家には帰らなければならない。娘のフィアンセに会うのもさることながら、明日は大事な会議があるのだ。しかし、このまままごまごしていると、麦田から自宅に電話が掛かってくるだろう。麦田はよく家に遊びに来ており、家族同然の関係である。郁代が本当のことをうっかりしゃべってしまったら、まずい。下手をすると、気が触れたと思われるおそれがある。いまのうちにこっちから掛けるしかない。

幸い、麦田は自宅にいた。麦田の用件は月曜の会議で羽生が提案するプロジェ

クトについて、仕入れ本部長の木村に根回しを済ましたというのだった。麦田は木村と同じ長野県の出身で高校の後輩である。県人会の席で話をしたらしい。

羽生が提案する予定になっているのは、インターネット時代に百貨店がどのよう生き残っていくかを具体的に描いたプロジェクトで、羽生の命令一下、経営企画室は来年度の目玉にしようと張り切っている。根回し程度で、わざわざ電話をしてくれる必要はないのだが、麦田としてはできるだけ早く上司に報告したかったのだろう。

電車が通り過ぎると、どこからか音楽が風に乗ってかすかに流れてきた。「恋人がサンタクロース、本当はサンタクロース……」。きんきんした女の声が混じっている。何か催し物をしているようだ。空腹が襲う。朝が遅かったため、昼を抜いた。今夜の鳥の丸焼きのために胃を空にしておいたのが祟っている。羽生は何か事があると、猛然と腹が空くたちである。

外に出ようとして、改札でつかまった。定期券が自動改札機で撥ねられたのだ。

駅員のところに行き、定期券を見せる。眼鏡を掛けた若い駅員は物珍しそうに羽生の定期券を眺めた。

「ほう、『西武池袋線』ですか。これじゃ、ここは通れませんね。別の切符か何か、持っているんじゃないですか」

「これしかないよ。確かに池袋からこれで来たんだから」

「お客さん、からかうのは止めて下さいよ」

「からかってなんかいるものか。そんなゆとりなんかはない」

羽生は声を荒立てた。駅員は羽生が本気であると分かったようだ。

「困りましたねえ」

「君は本当に西武池袋線というのを知らないのか」

「知るも知らないも、そんな線はここにはありませんよ」

風がひようと吹いていく。とにかくこの寒い構内から出るしかない。

「乗り越し料金を払うから、出してくれないか」

「でも、ない駅からの乗り越し料金というのはね、計算できませんよ」

「じゃあ、構内で今夜寝泊まりしろというのか」

駅員は羽生がだんだん気の毒になってきたようだ。少し精神状態が変だとも思ったのである。

「仕方ありませんね。今回だけです」

そう言って、早く改札口を通り過ぎるよう手で合図した。ゴルフバッグとボストンバッグを抱えた羽生は人気のない駅構内を抜けて、外に出た。

駅の前は駐車場になっており、たくさんの車が停車していた。周辺のビル内で飲んだり喰ったりしている人々の車だろうか。相変わらず音楽が流れてくる。曲は「ブルー・クリスマス」に変わっており、キンキンした女の声は消えている。曲は音楽の聴こえてくる方向に向かって、駐車場を横切り始めた。

夜空は澄み渡っており、高層ビルの上あたりに青ざめた月が凍りついている。下弦のあたりが少しへこんではいるが満月に近い。虚ろで大きな月である。月は

宙に物体が浮いているというよりは、その部分にだけ穴が開いており、穴の向こうに明るい世界が広がっているように思える。月の穴から誰かがこちらを見下ろしているのではないか。

月の穴から差ししてくる光を受けて、車のバンパーが鈍く光っている。何かを待ち受けて動きだそうとしている大きな爬虫類の群のようだ。ビルの上に赤いシグナルがあり、点滅を繰り返している。月の穴からこちらを監視している者と何事か合図を交わしているのではないか。

そのとき風が耳元でサワサワ鳴った。しかし、少しも冷たくはない。風ではなく、鼓膜の奥で耳鳴りがしたようでもある。軽くて細かい砂を布の上に流しているような音でもある。鼓膜を何か柔らかいもので撫ぜられたような感触が残る。そのとき、誰かが背中を囁いた。

「どうかな」

ぎよつとして振り向く。誰もいない。爬虫類のような車がぼんやり光りながら並んでいるだけだ。ゴルフバッグを下げ直し、再び歩き始める。数歩歩いて、もう一度振り返ってみる。依然、誰もいない。黙ったままの車の群の向こうに森閑とした駅があるだけだ。妙な錯覚があったのは、神経が高ぶっているせいだろうか。

ビルの下あたりから、また若い女のキンキン声がしてきた。さきほどと同じ曲である。「恋人がサンタクロース、本当はサンタクロース、違うよ。それは絵本だけのお話……」駐車場が終ると、電車の中から見た広場があり、ビルの入口に舞台が設けてあった。臨時の舞台のようで、壇上で白いブーツを履いた若い女が二人マイクを持って踊りながら唄っている。むき出しの腿に鳥肌が立っているのではないか。横断幕があり、「クリスマス・フェア」と書かれてある。三、四人の男が立ったまま彼らの曲を聴いているだけだ。

羽生はその横を通り過ぎて「ペンダム」と記されたビルの中に入っていった。恐ろしく明るく、喧騒に満ちた空間が羽生を迎え入れた。一階にはソバ、ラーメ

ン、回転寿司、牛丼、ハンバーガー、カレーライスなどの飲食店がずらりと並んでいる。上の方はゲームセンターになっているのか、ゲーム機となる金属音とテープの速い音楽が落ちてくる。

ニンニクの匂いが漂ってくるラーメンにする。中はカウンターしかなく、数人の若者が背中を丸め、無言でドンブリを抱えていた。バターを落としたチャーシュー麺を頼む。金八百七十円。

天井近くにあるテレビを観る。奇妙なことに、ここは見も知らぬ異次元の世界であるにもかかわらず、テレビには見慣れた、冴えない顔が映っている。日本の首相である。この人たちにとつても、あの男は自分の国の首相なのだろうか。画面の下に、J—IV—E—○○○—という表示があるほかは、普通のニュース番組と変わりはない。画面が変わり、アメリカ大統領の顔が映る。ハンサムな大統領が記者会見で何かをしゃべっているが、誰もテレビを観る者はいない。ニュース番組はラーメン屋のBGM程度の意味しかないらしい。

チャーシュー麺は大丈夫かなと思うほど早く出来上がった。目の前のどんぶりに胡椒をたっぷりまいて、ついでに酢を少々垂らす。まずいラーメンをうまく食べる方法だが、鳥の丸焼きとではあまりにも落差が大き過ぎた。口の中に化学調味料の味だけがしつこく残る代物で、コクも何もない。やはり当たり外れのないカレーにすべきだったのだが、冷えた体を早く暖めたかった。体は温まりはしたが、冷え冷えとした気持ちで千円札を出す。

ところが驚くべきことに、レジの女の子は千円札をまじまじと眺め、羽生の顔を怯えたような目でちらっと見てから、マネージャーのところに札を持っていった。マネージャーはつかつかと羽生に歩み寄った。

「お客さん、忙しいんだから、こんな冗談は止めて下さいよ」
客が一斉に羽生を見上げた。

「冗談って……バターを落としたチャーシューは八百七十円だろうか？」
マネージャーは羽生の目の前で千円札をバタバタさせながら、

「こんなもので払えると思ってるんですか」と語調をきつくした。

「千円札じゃだめなの？ 細かいのがないんだよ。万札ならあるけれど」

財布を開こうとする羽生をマネージャーは怒鳴りつけた。

「いい加減にしろよ。カードがあるだろう。カードが」

「チャーシューメン食べるのにいちいちカードが要るのか」

羽生は財布からVISAのカードを取り出して渡した。マネージャーはカードを見るなり、真っ赤になって床に叩きつけた。今度は羽生が声を荒くした。

「何するんだ」

「何するんだもあるか。アンタ、気は確かか。こんな玩具を出して」

周りで客が騒ぎ始めた。無銭飲食だと言っている。勢いに乗ったマネージャーは叫んだ。

「その財布を見せろ。こっちが代わりに払ってやる」

羽生は財布を渡す。マネージャーは素っとな狂な声を出した。

「こんなに持つてやがるぜ。ただの紙つぺらばかりだよ。あんた、ちよつと来
よ」

マネージャーは奥に羽生の手を引つ張ろうとした。抵抗したとたん手が外れ、そばに立っていた客の頬の当たりに触れた。

「何するんだ。こいつ」

羽生を突き飛ばす。羽生は負けずにその男を突き飛ばした。男はよろよろと後ろに倒れかかったが、数人が羽生の腕をねじ上げたり、頭を抑え付けたりした。しばらくしてドアが開き、硬い靴音がした。押さえつけられた下から見上げると、大男の警官が立っていた。背の高さが一メートル九十センチは越しているのではないだろうか。警官は無言で羽生に近寄ると、手錠をかちりとはめた。一瞬の出来事だった。ゴルフバッグとポストンバッグが自分のものと告げるのがやっつである。

羽生は客たちの嘲笑をあとに、パトカーに押し込まれた。パトカーは派手な音

を立てながら、闇の中を走り始めた。